日光男体山頂遺跡出土鏡（右手前の円鏡が原寸大）

日光男体山頂遺跡出土鏡の調査

鏡、と言えば姿を映すものですが、ガラスで作られ始めたのは明治時代のこと。それまでは、弥生時代から江戸時代にいたるまで長きにわたって、青銅で作られていました。青銅で鏡の役割を果たすのか？と思われるかもしれませんが、光沢のある金属板に姿を移せば、色はともかく形は映りますよね。

ここに所せましと敷き詰められているのは、古墳時代から鎌倉時代前期にかけての鏡。これらはすべて栃木県日光市にある男体山の山頂から発見されました。姿見が大量廃棄されたのではなく、どうやら霊峰の山頂を目指した修験者たちが鏡をまじないの道具として携え、山頂で奉賽（ほうさい）したようなのです。鏡の年代を調べると、平安時代のものが172面と多く、奉賽がこの頃もっとも盛んだったとわかります。全国でこれほど平安時代の鏡が出土した遺跡はほかにありません。

奈良文化財研究所では、2013年度にこれらの鏡の製作技法や化学組成について悉皆調査をしました。これによって未だあきらかにされていない製作地や流通経路、男体山に鏡が集中して奉賽された理由等の解明につなげたいと考えています。

（企画調整部　中川 あや）